



わが家はクレオール

荻野 アンナ
おぎの

父親はフランス系アメリカ人。より正確にはフランス生まれのアメリカ育ちで、イタリアやスペイン、クロアチアの血も入っている。それだけでインターナショナルな家庭との印象を与えるようだ。

顔が父とそっくりな私は、生まれも育ちも学校も日本だが、初めての人には「日本語お上手ですね」と言われることがある。せっかくの期待を裏切っても悪いからと、急にたどたどしい言葉づかいになり、謎の外国人を演じたりもする。

「日本語、シャベルノハ何トカナリマスガ、漢字、トツても難シデーズ」

これは別にウソではない。もともと誤字脱字が多い上に、ワープロを使うようになってから、漢字を忘れやすくなっている。

外見は「インターナショナル」だが、残念なことに、母国語以外は「ぺらぺら」というわけにはいかない。船長として世界を飛び回っていた父とは、子供のころほとんど話す機会がなく、父親というより、時々オミヤゲを持ってなくどこかのおじさん、ぐらいい思っていた。

英語は中学、フランス語は大学で始めた。退職した

父と、ようやく無駄話ができるようになって、困ったのは言葉である。父の日本語能力はひどいもので、帰宅した私を「イッテラッシャーイ！」と迎えてくれたことがある。そういう私も、英語で始めて最後まで続けられずに、途中でフランス語に切り換えたり、日本語を混ぜたり、というありさま。

He is very ケチンボ、n'est ce pas ?

これで通じてしまうのだから恐ろしい。ある種の単語、たとえばウンチャオシッコが必ずフランス語になるのは、父が幼年期をあちらで過ごしたためかもしれない。母に今夜はライスにするか、ブレッドにするかと問われて、父のほうがおはんと答えたりもする。

かくして家族以外の誰にも理解不可能な、オギノ（母方の姓）- ガイヤール（父方の姓）系クレオール言語が誕生した。ちなみに私はガイヤールで生まれたが、小学生のとき帰化してオギノになった。その折、アンナという名前に漢字を当てはめねばならなくなり、戸籍上は荻野安奈が正式である。

「荻野安奈」 「荻野アンナ」、そして「アンナ・ガイヤール」。名前は三つだが、舌はひとつだけ。父は英語、母は日本語で同時に話しかけられて、さてどちらで答えたものが、と今日も首をひねっている。

(小説家)